

70 28歳の1回経産婦。妊娠25週時に少量の性器出血と下腹部痛とを主訴に来院した。1週前の診察では子宮頸管長は40mmで、母児共に異常を認めなかった。昨夜から不規則な子宮収縮を自覚し、明け方排尿時に少量の性器出血に気付いた。4年前に子宮頸部上皮内癌で子宮頸管円錐切除術を受け、2年前の初回妊娠は妊娠32週で早産となり、今回は妊娠14週時にShirodkar頸管縫縮術を受けている。体温37.3℃。脈拍96/分、整。血圧120/72mmHg。腔鏡診で帯下は血性、外子宮口は閉鎖し羊水の流出は認めない。内診では子宮口は中央で硬く展退度は50%、先進部は胎児殿部で下降度Sp-3である。腹部超音波検査では、胎児の推定体重は662g、羊水量に異常を認めない。子宮頸管長20mm。胎児心拍数陣痛図では10~15分間隔の子宮収縮を認めるが、心拍数パターンに異常を認めない。1週前の外来での膣分泌物培養検査では、*Enterococcus faecalis* 2+、*Streptococcus agalactiae*(GBS) 2+、*Lactobacillus species*(-)で、頸管粘液中の好中球エラスターゼは陽性である。尿所見：蛋白1+、糖(-)。血液所見：赤血球345万、Hb 11.7g/dl、白血球10,200、血小板20万。CRP 1.3mg/dl。

まず行うのはどれか。

- a 子宮収縮薬投与
- b ペニシリン系抗菌薬投与
- c 羊水除去による子宮内圧減圧
- d 子宮頸管再縫縮
- e 帝王切開

71 8歳の女兒。発熱と発疹とを主訴に来院した。3日前から38℃台の発熱、咽頭痛および咳があり、2日前から体を痒がっていた。四肢と顔面との皮膚は発赤し、細かな点状出血様の小発疹を多数認める。口の周囲は顔面と比べて蒼白である。舌はイチゴ状に乳頭が腫脹し、咽頭に暗赤色の発赤と点状出血とを認める。扁桃は発赤腫大し、表面に滲出物を認め、綿棒で表面をこすると膿性粘液が得られる。結膜に発赤を認めない。

最も考えられるのはどれか。

- a 風疹
- b 麻疹
- c 川崎病
- d 伝染性紅斑
- e A群β溶血性レンサ球菌感染症

72 23歳の男性。尿道分泌物を主訴に来院した。2週前に異性との性交渉があった。数日前から漿液性の尿道分泌物、ごく軽度の排尿痛および尿道不快感があった。尿所見：蛋白(±)、糖(-)、沈渣に赤血球(-)、白血球10~30/1視野。

抗菌薬として適切なのはどれか。

- a アミノグリコシド系
- b カルバペネム系
- c セフェム系
- d ペニシリン系
- e マクロライド系

73 75歳の女性。咳嗽と呼吸困難とが増悪したため入院した。2年前に特発性間質性肺炎の診断を受けた。1年前の急性増悪以降、現在までアザチオプリン50 mg/日とプレドニゾン15 mg/日とを内服中である。1か月前から微熱、咳嗽および呼吸困難を自覚し、次第に増悪を認めた。12歳時に左胸膜炎。意識は清明。身長147 cm、体重48 kg。体温37.6℃。脈拍112/分、整。血圧132/64 mmHg。心音に異常を認めない。胸部背面にcoarse cracklesを聴取する。血液所見：赤血球314万、Hb 9.8 g/dl、Ht 29%、白血球7,400、血小板33万。血液生化学所見：血糖159 mg/dl、総蛋白4.7 g/dl、アルブミン2.4 g/dl、尿素窒素10.4 mg/dl、クレアチニン0.5 mg/dl、AST 12 IU/l、ALT 9 IU/l、LDH 217 IU/l(基準176~353)、ALP 182 IU/l(基準260以下)。免疫学所見：CRP 12.8 mg/dl、KL-6 1,020 U/ml(基準500未満)。胸部エックス線写真(別冊No. 15A)、胸部単純CT(別冊No. 15B)及び喀痰のZiehl-Neelsen染色標本(別冊No. 15C)を別に示す。

対応として適切なのはどれか。2つ選べ。

- a 患者隔離
- b 嫌気性菌培養
- c プレドニゾン増量
- d PCR法による菌の同定
- e ペニシリン系抗菌薬投与

別冊 No. 15 写真A、B、C
----------------------

74 56歳の男性。歩行時のふらつきを主訴に4か月前に来院した。酒に酔っているかのように左右にふらふらして歩くようになり、本人は「平衡感覚がおかしい」、「視点を動かすと風景の残像がしばらく残る」、「夜になるとものが見にくい」、「字が読みにくい」などと訴えていた。食欲はあった。2か月前から喋らなくなり、意思の疎通が困難になり、一日布団の上で寝て過ごすようになった。妻が世話していたが、トイレには行かずにオムツを使っていた。今月から呼びかけに全く反応しなくなり、周囲の物に視線を向けなくなった。また体がカチカチになってきて、上半身を起こすことができなくなった。食べ物は口に押しつけければ、なんとか食べることができた。るいそう、脱水、褥瘡、除皮質硬直、ミオクローヌス及び四肢深部腱反射亢進を認める。頭部単純MRIのT2強調像と拡散強調像(別冊No. 16A、B)とを別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 多発性硬化症
- b 神経 Behçet 病
- c Creutzfeldt-Jakob 病
- d 副腎白質ジストロフィー
- e MELAS(ミトコンドリア脳筋症)

別 冊

No. 16 写真A、B

75 28歳の男性。乾性咳、全身倦怠感および呼吸困難を主訴に来院した。2か月前から乾性咳と全身倦怠感とが出現し、1か月前から労作時に呼吸困難を感じるようになった。1週前に38.2℃の発熱があり呼吸困難が安静時でもみられるようになった。意識は清明。身長176 cm、体重52 kg。体温37.8℃。脈拍104/分、整。血圧104/64 mmHg。顔面蒼白で口唇にチアノーゼを認める。血液所見：赤血球364万、Hb 10.4 g/dl、白血球13,200(桿状核好中球7%、分葉核好中球78%、好酸球3%、好塩基球1%、単球8%、リンパ球3%)、血小板26万。免疫学所見：CRP 6.8 mg/dl、Tリンパ球CD4/CD8比0.2(基準0.6~2.9)、β-D-グルカン26.0 pg/ml(基準20以下)、寒冷凝集素陰性。動脈血ガス分析(自発呼吸、room air)：pH 7.42、PaO<sub>2</sub> 48 Torr、PaCO<sub>2</sub> 32 Torr。

呼吸困難の原因病原体として最も可能性の高いのはどれか。

- a トキソプラズマ
- b マイコプラズマ
- c クリプトコッカス
- d ニューモシスチス
- e サイトメガロウイルス

76 26歳の男性。腹痛と血便とを主訴に来院した。5日前から左下腹部痛と粘血便とを認めた。1か月前にインド旅行をした。身長170 cm、体重68 kg。体温36.5℃。脈拍84/分、整。血圧118/62 mmHg。眼瞼結膜と眼球結膜とに異常を認めない。腹部全体に軽度の圧痛を認める。筋性防御を認めない。大腸内視鏡写真(S状結腸)(別冊No. 17A)と新鮮便の顕微鏡写真(別冊No. 17B)とを別に示す。

治療薬として適切なのはどれか。

- a アンホテリシン B
- b エリスロマイシン
- c カナマイシン
- d ガンシクロビル
- e メトロニダゾール

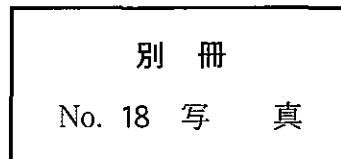
別 冊

No. 17 写真A、B

77 29歳の男性。両側の股関節痛を主訴に来院した。6か月前から誘因なく両側の股関節痛が出現し、徐々に増強して跛行を自覚するようになった。既往歴は特にない。飲酒はウイスキー 360 ml/日を6年間。股関節エックス線単純写真正面像(別冊No. 18)を別に示す。

考えられるのはどれか。

- a 骨髓腫
- b Ewing 肉腫
- c 変形性股関節症
- d 大腿骨頭壊死症
- e 神経病性関節症



78 28歳の女性。B型肝炎の治療のために内科に入院した。入院当日に大声を出して興奮状態となったため精神科に転科となった。「盗聴され、監視されている」、「殺される」とおびえながら話す。以前、覚醒剤の乱用で同様の状態が発生したことがあるが、ここ2年間は覚醒剤を使用していなかった。今回の入院を契機に急激にこのような状態となった。意識は清明。

最も考えられるのはどれか。

- a 覚醒剤の急性中毒状態
- b 覚醒剤の身体依存状態
- c 覚醒剤依存症の離脱症状
- d 覚醒剤使用中止の反跳現象
- e 覚醒剤精神病のフラッシュバック

79 34歳の男性。酪農業。乾性咳と呼吸困難とを主訴に来院した。2か月前から昼間の農作業を終えると夕方から乾性咳が出現し始め、1週前から呼吸困難と37℃台の発熱とを伴うようになった。症状は作業をしない日曜日にはみられない。血液所見：赤沈26 mm/1時間、白血球9,600(桿状核好中球4%、分葉核好中球44%、好酸球4%、好塩基球1%、単球5%、リンパ球42%)、血小板28万。血液生化学所見：IgG 2,380 mg/dl(基準960~1,960)、IgE 120 IU/ml(基準250未満)、AST 22 IU/l、ALT 18 IU/l、LDH 282 IU/l(基準176~353)。免疫学所見：CRP 3.2 mg/dl、CH50 28 U/ml(基準30~40)。胸部エックス線写真でびまん性のすりガラス様陰影を認める。

原因を同定するために適切なのはどれか。

- a 抗原吸入試験
- b 沈降反応試験
- c 皮膚プリック試験
- d リンパ球刺激試験
- e ヒスタミン遊離試験

80 60歳の男性。意識不明のため搬入された。1時間前、下水道の点検のため同僚とマンホールのふたを開けて内部を確認し、そのまま中に入った。同僚は通行人の誘導のためその場を離れ、20分後に戻ってみると本人の姿が見えず、間もなく下流で発見された。

この種の事故防止のために、測定が義務付けられているのはどれか。

- a 酸素
- b メタン
- c 一酸化炭素
- d 二酸化炭素
- e アンモニア